



# 現代キリスト教会の危機

現代キリスト教会のリバイバルは本物か？

大争闘シリーズ No.6



大争闘シリーズ No. 6

# 現代キリスト教会の危機

現代キリスト教会のリバイバルは本物か？

(キリストとサタンの大争闘 27 章)

# 目次

## Contents

罪の自覚と悔い改め	1
現代のリバイバルは本物か	5
真の教会に対するサタンの攻撃	7
教会の無力さの原因	10
誤った律法観	12
律法と信仰との関係	15
清めとは何か	20
清めの实例	24
信仰と行い	28
全人的な清め	31
清めと日常生活	35
キリスト者の特権	37
キリストに頼る勝利の生活	42

## はじめに

現代キリスト教会に見られる現象は、聖書から考察してどれほどキリスト教の原点から逸脱しているだろうか。安価な恵み、感傷的愛、悔い改めと服従なしの信仰による義認、奇跡の強調、福音でなくケアリング教会（思いやり）、セレブレーション、メガチャーチ、カリスマ運動、み言葉の説教よりもエンターテイメント、急成長で評価される教会のあり方、生活の改変なしのリバイバル等々は神に嘉せられるものだろうか。

本当のリバイバルと偽のリバイバルをどう見分けるか。

## 罪の自覚と悔い改め

神の言葉が忠実に説かれたところではどこでも、それが神から出たものであることを証明する結果が現れた。神の霊が、そのしもべたちの語るメッセージに伴い、その言葉には力があつた。罪人は、良心が目覚めるのを感じた。「すべての人を照らすまことの光があつて、世にきた。」その光が彼らの心の密室を照らし、暗黒に隠された様々なものを示した。彼らは心に深い感動を受け、罪を認め、義を認め、また来たるべきさばきについて、目を開かれた。彼らは主の義を意識し、心を探られる神の前に、罪と汚れのまま出ることを非常に恐れた。彼らは苦悶の声をあげて、「だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫んだ。この時、罪人のために無限の犠牲を払われたカルバリーの十字架が示され、彼らは、自分たちの罪を贖い得る者は、キリストの功績以外にないことを悟った。ただこれだけが、人を神に和解

させ得ることを知った。彼らは謙遜と信仰とをもって、世の罪を取り除く神の小羊を受け入れ、イエスの血によって「今までに犯した罪のゆるし」を得た。



この人々は、悔い改めにふさわしい実を結んだ。彼らは信じてバプテスマを受け、キリスト・イエスにあって新しく造られた者として、新しい人生を歩みだした。彼らは以前の欲に従うことなく、神のみ子を信じる信仰によってみ足の跡に従い、主のご品性を反映し、主が清くあられるように自分たちも清くなろうとした。また彼らは、かつて憎んだものを愛し、愛したものを憎むようになった。高慢で自負心の強い者は、柔和で謙遜になり、虚栄心があつて横柄な人は、まじめで控え目な人になった。不敬の者は敬虔に、酒飲みは謹直に、放蕩者は純潔になった。

世俗のむなしい流行は、放棄された。キリスト者は「髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを」求めた。「これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」(1ペテロ 3:3,4)。

リバイバル(信仰復興)が起こり、深い内省と謙遜をもたらした。罪人に対しては厳粛熱心に訴え、キリストの血による贖いに対してはあわれみを祈り求めるのが、リバイバルの特徴であった。男も女も魂の救いのために神に祈り、神と格闘した。こうしたリバイバルの結果、克己と犠牲をも惜しまず、むしろキリストのために試みと辱めとを受けるに足る者とされたことを喜びとする者が現れた。人々は、イエスの名を告白する者たちの生活が変化したことを認めた。社会は、彼らの感化によって益を受けた。彼らはキリストと共に集め、永遠の生命を刈り

取るために霊にまいた。

彼らについては「悲しんで悔い改めるに至った」と言うことができる。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント 7:9-11)。

これこそ、神の霊の働きの結果である。改革を伴わない悔い改めは、真の悔い改めとは言えない。もし罪人が、誓約を実行し、盗んだものを返し、罪を告白し、神と同胞とを愛するならば、彼が神と和らいだことは確かである。昔は、宗教的覚醒が起きたときには、それに伴って、このような結果が生じた。そうした実によって、それらは、人々の救いと人類の向上のために神

の祝福を受けたものであることが明らかにされた。

## 現代のリバイバルは本物か

ところが、現代行われているリバイバルの多くは、初期の時代において神の



しもべたちの働きに伴った神の恵みのあらわれと、著しく異なっている。確かに、一般の人々の興味が呼び起こされ、多くの者が自分たちは改心したと言い、教会に多数の信者が加わって来たが、それに伴って真の霊的生命が向上したということを保証するような結果はあらわれていない。一時的に火は燃え上がるけれども、すぐに消えて、暗黒は前より一層深刻になる。

一般のリバイバルは、ともすれば、人の想

像に訴え、感情を刺激し、新奇なことに対する愛好心を満足させるようなやり方で行われている。こうして得た改心者は、聖書の真理に耳を傾けることを喜ばず、預言者や使徒たちの証に興味を示さない。集会も何か感情をそそるようなものが無い限り、彼らを引きつけることができない。冷静な理性に訴えるメッセージは、少しも反応を起こさない。彼らの永遠の幸福に直接関係のある、神の明らかな警告の言葉も、全く注意を払われないのである。

真に改心したすべての魂にとって、神と永遠の事物とに対する関係は、人生の一大問題である。しかし、今日の一般教会のどこに、神への献身の精神があるだろうか。改心したという人でも、依然として高慢と世を愛する心を捨てていない。彼らが自ら進んで自分を犠牲にし、十字架を取り、謙遜で柔和なイエスのみ跡に従おうとしないのは、改心前と少しも変わっていない。宗教は、多くの者が、その名をとらえながら、

その原則と主義に無知であるために、無神論者や懐疑論者の物笑いとなってきた。敬虔さの持つ力は、今日の多くの教会からほとんど姿を消してしまった。行楽、演劇、バザー、壮麗な建築物、信者の華美な装いなどが、神の思いを遠ざけてしまっている。また、土地、財産、世俗の職業が信者の心を占領し、永遠のことに気を配る者はほとんどいない。



## 真の教会に対するサタンの攻撃

しかし、信仰と敬虔さが一般に衰微したとはいっても、これらの教会の中にキリストの真の弟子たちがいるのである。地上に神の最後のさばきが下るに先だって、神の民の間に、使徒時代以来かつて見られなかったような初代の敬虔

のリバイバルが起きる。神の霊と力が彼らの上に注がれる。その時、多くの者が、神と神の言葉に対する愛に代えてこの世を愛してきた教会から離れる。牧師も信徒も、多くの者が、再臨を迎える特殊な民を備えるために、神が宣布させておられる現代に対する大真理を、歓迎して受け入れるであろう。しかし、魂の敵はこの運動を妨害しようとする。そして、こうした運動が起こる前に、偽物を提示することによってそれを妨害しようとする。彼は、自分の欺瞞の力の下に集まる諸教会内において、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかける。大いなる宗教的関心と思われるようなものが現れる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべきことをしておられると喜ぶが、それは、別の霊の働きなのである。宗教的装いの下に、サタンは、キリスト教世界に自らの勢力を広げようとする。

過去半世紀間に起こったリバイバルの多く

には、多少ながら  
この勢力の跡が見  
られる。今後はま  
すます激しいもの  
になるであろう。  
そこには必ず、真



理と虚偽の混合と感情的な興奮が起こり、それは人を欺くのに好適なのである。しかし誰れも欺かれる必要はない。神の言葉の光に照らして吟味するならば、この種の運動の本質を見定めることは難しいことではない。人々が聖書の証をおろそかにし、心を試し、克己と世俗の放棄とを要求する明白な真理に背を向けるならば、神の祝福が伴わないのは确实である。そして、「その実によって彼らを見わけるであろう」という、キリストご自身がお与えになった規準によって、この種の運動が神の霊の働きでないことは明らかなのである（マタイ 7:16）。

## 教会の無力さの原因

神は、み言葉の真理の中で、ご自身に関する啓示を人間にお与えになった。そして、それを受け入れるすべての者にとって真理は、サタンの欺瞞から彼らを守る盾である。今日、宗教界に行きあたりつつある罪惡に対して門戸が開かれたのは、これらの真理が軽視された結果である。そのため、神の律法の特質と重要性が、ほとんど見失われている。神の律法の性質、永続性、義務に対する誤った観念が、悔い改めと清めについての誤りを引き起こし、その結果教会内の敬虔さの標準を低下させている。現代のリバイバルに神の霊とその力が欠けている理由は、ここにある。

様々な教派の信仰深い人々が、この事実を認めて嘆いている。エドワード・A・パーク教授は、現代の宗教界の危機に関して、次のように言っている。「危険の原因の一つは、説教壇か

ら神の律法を強く主張しないことにある。かつての説教壇は、良心の声が響くところであった。……主イエスの模範にならい、説教壇から律法の戒めと警告とを容赦なく宣べた我々の偉大な説教者たちの説教には、常に驚くほどの尊厳が伴っていた。彼らは常に、二大真理を繰り返した。すなわち、律法は神の完全な品性の写しであり、律法を愛さない者は、福音を愛さない者であるという真理である。なぜなら律法は、福音と等しく、神の真の品性を反映する鏡だからである。この危険、すなわち律法を愛さないことは、さらにまた他の危険へと発展して、罪の害悪とその範囲、その恐ろしさなどを過小評価させるに至る。律法が義であればあるほど、それに服従しないことははなはだしい悪なのである。……

上述の危険と密接に関係しているのが、神の義を軽視する危険である。今日の説教の傾向は、神の義を神の慈愛から引き離し、この慈愛を

原則として高めるよりもむしろ一つの感情に低下させている。新しい神学は、神が結合されたものをバラバラに分解してしまった。神の律法は善か悪か。言うまでもなく善である。それならば正義は善である。なぜなら、正義は律法を実施するものだからである。人間は、神の律法と正義を軽視し、人間の不服従の程度と恐ろしさを軽視する習慣から、罪の贖いのために備えられた恵みを過小評価する習慣に陥りやすい。」こうして人々は、その心に福音の価値とその重大性を忘れ、そしてまもなく、実質的に聖書そのものを放棄するようになる。

## 誤った律法観

宗教教師たちの多くは、律法はキリストの死によって廃され、それゆえに人類はその要求から解放されたと主張する。中には、律法を重苦しいくびきであると言い、律法の束縛とは対照

的に、福音の下において自由が<sup>きょうじゆ</sup>享受できると主張する人々もいる。

しかし預言者や使徒たちは神の聖なる律法をそのようには見なさなかった。ダビデは言った。「わたしはあなた



のさとしを求めたので、自由に歩むことができます」(詩篇 119:45)。使徒ヤコブはキリストの死後、十誡のことを「尊い律法」「完全な自由の律法」と言っている(ヤコブ 2:8;1:25)。黙示録の記者ヨハネも、キリストの十字架の半世紀後に、「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、神の律法を行う者」は幸いであると言明している(黙示録 22:14 欽定訳)。

キリストがその死によって天父の律法を廃

したという主張には、何の根拠もない。もし神の律法の変更、または廃止が可能であるならば、人類を罪の刑罰から救うために、わざわざキリストが死なれる必要はなかった。キリストの死は、律法を廃止するどころか、むしろその不変性を証明するものである。神のみ子が来られたのは「律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとする」ためであった（イザヤ 42:21 欽定訳）。キリスト自らも「わたしが律法や預言者を廃するためきた、と思ってはならない。」「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはな」と言われた（マタイ 5:17,18）。また、ご自身について、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言しておられる（詩篇 40:8）。

神の律法は、その性質そのものから考えても、不変のものである。それは、制定者であられる神の意思と品性との啓示である。神は愛

である。それゆえ、彼の律法も愛である。その  
二大原則は、神に対する愛と人に対する愛であ  
る。「愛は律法を完成するものである」（ロー  
マ 13:10）。また、神の品性は義であり真理で  
ある。神の律法もまたそうである。詩篇記者  
は言っている。「あなたのおきてはまことで  
す。」「あなたのすべての戒めは正しい」（詩篇  
119:142,172）。使徒パウロも「律法そのもの  
は聖なるものであり、戒めも聖であって、正し  
く、かつ善なるものである」と宣言している  
（ローマ 7:12）。神の心と意思の表現であるこ  
のような律法は、これを制定なさった神と同様  
に永続的なものでなければならない。

## 律法と信仰との関係

人間を神の律法の原則に調和させることによ  
って神と和解させるのは、悔い改めと清めの  
働きである。初め人類は、神のかたちにかたどっ

て創造され、神の律法とその性質とに完全に調和していた。つまり、義の原則が人の心に書かれていた。しかし罪が、創造主から人を引き離れた。もはや彼は、神のかたちを反映しなくなった。彼の心は、絶えず神の律法の原則と争うようになった。「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ローマ 8:7)。しかし神は、人間が神と和解することができるように、「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。」人間は、キリストの功績によって、再び創造主との調和を回復することができるのである。そのためには、心が神の恵みによって新しくされ、天から新しい生命を受けなければならない。この変化が新生であって、これを経験せずに「神の国を見ることはできない」とイエスは言われるのである。

神と和解する第一歩は、罪を認めることである。「罪は不法である。」「律法によっては、

罪の自覚が生じるのみである」(Iヨハネ 3:4、ローマ 3:20)。自分の罪を知るためには、罪人は自分の品性を、神が立てられた義の一大標準によって吟味しなければならない。この標準は、正しい品性の完全さを示す一個の鏡として、罪人に自分の品性の欠陥を明らかに気づかせるものである。

しかし律法は、人間に罪を示すが、救いは与えない。律法は、これを守る者に生命を約束するが、これを犯す者には死を宣告する。罪の汚れと罪の刑罰から人間を解放することができるのは、ただキリストの福音だけである。人間は、神の律法を犯したのであるから、神に向かっては悔い改めをなし、キリストに対しては信じてその贖いの犠牲を受け入れなければならない。こうして人間は「今までに犯した罪のゆるし」を受け、神の性質にあずかる者となり、子たる身分の霊を授けられた神の子となり、神を「アバ、父よ」と呼ぶのである。

さて、このような境地に入った者は、神の律法を犯してもよいのであろうか。パウロは次のように言っている。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。」そしてヨハネは宣言する。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない」(ローマ 3:31;6:2、 I ヨハネ 5:3)。新たに生まれることによって、人の心は、神の律法と一致すると共に、神と調和するようになる。この驚くべき変化が罪人の中に起きたとき、人は、死から生命へ、罪から聖潔へ、違犯と反逆から服従と忠誠へと移ったのである。こうして神に逆らう古い生活は終わり、和解と信仰と愛の新しい生活が始まり、やがて「律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる」のである(ローマ 8:4)。その時、

「いかにわたしはあなたのおきてを愛すること  
でしょう。わたしはひねもすこれを深く思いま  
す」という魂の言葉が発せられるのである（詩  
篇 119:97）。

「主のおきては完全であって、魂を生きかえ  
らせ」る（詩篇 19:7）。人間は、律法がなけれ  
ば、神の純潔と神聖さ、あるいは自分の罪とそ  
の汚れに関して、正しい考えを持つことができ  
ない。罪についての真の自覚もなく、悔い改め  
の必要も感じない。自分たちが、神の律法の違  
反者であるという墮  
落の状態を知ること  
も、キリストの贖罪  
の血の必要を感じる  
こともない。心の根  
本的变化も生活の改



変もなしに、救いの希望を受け入れる。このよ  
うな表面的改心が広く行われていて、キリスト  
と結合したことのない多くの者が教会に加えら

れているのである。

## 清めとは何か

また、神の律法の軽視や拒否から生じる誤った聖化論が、今日の宗教運動の重要な位置を占めている。しかし、このような理論は教義的に偽りであり、実際生活に及ぼす結果からしても危険である。そして、それらの説が一般に歓迎されているという事実を見ると、この点についての聖書の教えをすべての者がはっきり理解することが、なお一層必要となる。

真の清め（聖化）は、聖書が教えている教理である。使徒パウロは、テサロニケ教会への手紙の中で次のように言っている。「神のみこころは、あなたがたが清くなることである。」そして、「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように」と祈っている（Iテサロニケ 4:3;5:23）。聖書は、清めとは何

であるか、どのようにしてそれに到達できるかを、はっきりと教えている。救い主は、弟子たちのために祈られ、「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」と言われた（ヨハネ 17:17,19 参照）。パウロは信者たちに「聖霊によってきよめられ」るようにと教えた（ローマ 15:16）。聖霊の働きとは、何であろうか。イエスは、弟子たちに次のように言われた。「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」（ヨハネ 16:13）。詩篇記者も、「あなたのおきてはまことです」と言っている。神の言葉と聖霊によって、神の律法の中に現れている義の大原則が、人間に示される。そして、神の律法は「聖であって、正しく、かつ善なるものであり、神の完全な写しであるから、その律法に従って形成される品性も、清いものとなる。キリストは、このような品性の完全な模範である。「わたし（は）わたしの父のいましめを守った。」「わたしは、いつも神のみこころ

にかなうことをしている」と主は言われる（ヨハネ 15:10;8:29）。キリストの弟子たちは、彼のようにならなければならない。神の恵みによって、聖なる神の律法の原則に調和した品性を形成しなければならない。これが聖書の言う清めである。

この働きは、キリストを信じる信仰によってのみ成就されるもので、神の霊の内住の力によるのである。パウロは信徒たちに「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」と勧告している（ピリピ 2:12,13）。キリスト者も罪の誘惑は感じるが、しかし常にそれと戦い続ける。ここにおいて、キリストの援助が必要になる。キリストの助けによって人間の弱さが神の力と結合し、「感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに

勝利を賜ったのである」と信仰によって叫ぶのである（Iコリント 15:57）。

聖書は、清めの働きが<sup>ぜんしん</sup>漸進的なものであることを、はっきり示している。罪人が悔い改め、贖罪の血によって神と和解するとき、キリスト者の生活は始まったばかりである。これから彼らは、「完全を目ざして進」み、「キリストの満ちみちた徳の高さにまで」成長しなければならない。

使徒パウロは言っている。「ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸



ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」（ピリピ 3:13,14）。ペテロも、聖書が教える清めへと到達するため

の段階を、我々に提示している。「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。……そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」(Ⅱペテロ 1:5-10)。

## 清めの実例

聖書の言う清めを経験する者は、謙遜の精神をあらわす。彼らは、モーセのように、聖なるお方のおそるべき威光をながめ、無限のお方の純潔と崇高な完全さに比べて、自分たちがどんなに無価値であるかを認めるようになる。

預言者ダニエルは、真の清めを体得したよい例である。彼の長い一生は、神のための気高い奉仕に満ちていた。彼は神に「大いに愛せられる人」であった(ダニエル 10:11)。しか

し、この榮譽にあ  
ずかった預言者は、  
決して自分の純潔  
や清さを誇らない  
で、むしろ心の底  
から罪深いイスラ



エルの一人として、自国民のために神の前で懇願した。「われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです。」「われわれは罪を犯し、よこしまなふるまいをしました。」ダニエルは「こう言って祈り、かつわが罪とわが民イスラエルの罪をざんげ」したのである。そして、後に、神のみ子が現れて、彼に教えを授けられたとき、「わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」とダニエルは言っている（ダニエル 9:18,15,20;10:8）。

ヨブも、つむじ風の中から主の声を聞いたときに、「それでわたしはみずから恨み、ちり灰

の中で悔います」と叫んだ（ヨブ記 42:6）。イザヤは主の栄光を見、ケルビムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と呼ばれるのを聞いて、「わざわざなるかな、わたしは滅びるばかりだ」と叫んだ（イザヤ 6:3,5）。パウロは、第三の天にまで引き上げられ、人間には語ることでできない言葉を聞いた後、自分のことを「聖徒たちのうちで最も小さい者である」と言っている（Ⅱコリント 12:2-4 参照、エペソ 3:8）。また、かつては主の胸によりかかった愛弟子ヨハネも、キリストの栄光に接したとき、その足下に倒れて死人のようになった（黙示録 1:17 参照）。

カルバリーの十字架の影を歩く者には、自分もはや罪を犯さないなどと誇ったり、自己称揚に陥るようなことは決してない。むしろ彼らは、自分たちの罪が、神のみ子の心臓を破裂させるほどの苦悩を引き起こしたことを感じる。そしてこの思いが、彼らをへりくだらせる。イ

エスに最も近く生活する者が、人間の弱さと罪深さを最もはっきりと認める。そして自分たちの唯一の希望を、十字架につけられ復活された救い主の功績に置くのである。

現在、宗教界において注目を集めている清めには、自己称揚の精神と神の律法の無視とが伴っており、このことは、それが聖書の宗教とは異なったものであることを示している。その主唱者たちは、清めとは瞬間的な業であって、ただ信仰だけによって、完全な清めに達することができると主張している。彼らは、「ただ信じなさい。そうすれば、祝福が与えられる」と言う。これを受ける者は、これ以上努力することは不必要であるかのように考えている。そればかりではない。彼らは神の律法の権威を否定し、自分たちは戒めを守る義務から解放されたと主張する。しかし、神のご性質とみ旨の表現であり、何が神のみこころにかなうかを示している原則に調和せずして、人間は、神のみ旨と

ご品性とに一致して清い者となることができるであろうか。

## 信仰と行い

何の努力も克己も、世俗の愚かさからの分離も要求しない安易な宗教を望む心が、ただ信じさえすればよいという、一般うけのする信仰の教義を作り上げた。使徒ヤコブは次のように言っている。「わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。……ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰のむなしいことを知りたいのか。わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とさ



れたのではなかったか。あなたが知っているとおおり、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ……たのである。これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」(ヤコブ 2:14-24)。

聖書の証言は、この行いを伴わない信仰という人を惑わす教義に反対している。あわれみを受ける条件に従わないで神の恵みを受けることができることを主張することは、決して信仰ではない。それは、むしろ僭越であり臆断である。なぜなら、真の信仰は、聖書が定める規定と約束とに基づくものだからである。

神のご要求を一つでも故意に犯していながら、清くなれると信じて、自分を欺いてはならない。罪と知りながらそれを犯すことは、聖霊の証の声を沈黙させ、魂を神から引き離すものである。「罪は不法である。」そして、「すべて罪を犯す者〔律法を犯す者〕は彼を見たことも

なく、知ったこともない者である」(Iヨハネ 3:6)。ヨハネは彼の手紙の中の至る所で愛について述べているが、しかしまた、清められたと口では言いながら、神の律法を犯す生活をする者の正体を、摘発することを躊躇しなかった。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」(Iヨハネ 2:4,5)。ここに、すべての人の信仰の告白を試みる試金石がある。我々は天においても地においても、ただ一つしかない神の立てた清めの標準によって量り、これに達しない者を清い者と言うことはできない。もし人々が、道徳律を重んじず、神の教えを軽んじて無視し、これらの最も小さい戒めの一つでも破り、またそうするように教えるならば、そのような人々は、神の目からは何の評価もされない。そして我々は、彼らの主張することには何の根拠もないことを知ることができる

のである。

また、自分には罪がないと主張する者は、そう主張すること自体が、清めからほど遠い証拠である。人が自らを清い者のように考えるのは、彼が、神の無限の純潔と神聖さとを真に認識していないからである。あるいは、神の品性と調和するためには人がどのようにならなければならないかを、悟らないためである。また、イエスの純潔と気高い美しさを知らず、罪の邪悪さを忌み嫌うことについて真に理解しないところからくる主張である。自分とキリストとの距離が遠ければ遠いほど、また、キリストのご品性とご要求に対する見解が不十分であればあるほど、人間はますます、自分自身の目に正しく見えるのである。

## 全人的な清め

聖書に示されている清めとは、全存在一霊

と魂と体一を含むものである。パウロはテサロニケの信徒のために「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」と祈った（Iテサロニケ 5:23）。また彼は、信徒たちに、「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」と書いた（ローマ 12:1）。旧約時代において、神のみ前に犠牲として献げられるものは、みな厳密に調べられた。その動物にもし一点でも欠陥があれば、それは拒否された。なぜなら、神から、供え物は「傷のないもの」でなければならぬと命じら



れていたからである。そのようにキリスト者も、自分たちの体を「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として」ささげるように命じられている。そうするためには、彼らのすべての能力を、なしうる最上の状態に保たなければならない。肉体的、または知的能力を弱める習慣はすべて、人を創造主に奉仕するのにふさわしくない者にしてしまう。我々が自分たちのささげ得る最上のものよりも劣るものをささげるとき、神は喜ばれるであろうか。キリストは「心をつくし……て、主なるあなたの神を愛せよ」と言われた。心を尽くして神を愛する者は、自らの生涯をもって最上の奉仕をすることを望み、常に神のみ心を行う能力を促進させる法則に、心身のすべての能力を調和させようと努めるであろう。彼らは、情欲や食欲をほしいままにして、天の父にささげるべき供え物を弱めたり汚したりはしないであろう。

ペテロは言っている。「たましいに戦いをい

どむ肉の欲を避けなさい」と（Ⅰペテロ 2:11）。すべての罪深い満足は、身体の機能を麻痺させて、霊的、知的感覚力を鈍らせる。そして、神の言葉や聖霊も、心に何の印象も与えることができなくなるのである。パウロは、コリント人に次のように書いている。「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではないか」（Ⅱコリント 7:1）。そして彼は、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和」などのみ霊の実に「自制」も加えている（ガラテヤ 5:22,23）。

このようなみ言葉があるにもかかわらず、キリスト者と称する何と多くの者が、金もうけや流行を追ってその能力をすり減らしていることであろう。また、いかに多くの者が、暴食、飲酒、放蕩などによって、神のかたちである人性を墮落させていることであろう。しかも教会は、これを譴責するどころか、かえって食欲をあおり、物欲や快樂を愛する心に訴えることによって、

こうした害悪を助長し、キリストに対する愛が弱いために供給できない教会の資金を、補充しようとするの



である。もしキリストが、今日の教会に入っ  
てこられ、宗教の名のもとに行われている飲食や汚れた取り引きを見られるならば、昔、神殿から両替人たちを追い出されたように、これらの神を汚す人々をも追い出されるであろう。

## 清めと日常生活

使徒ヤコブは、天からの知恵は「第一に清く」と言っている。もしも彼が、たばこで汚れたくちびるでイエスの尊いみ名を語る人々、その息も体も悪臭に染まった人々、大気を汚染して周囲の人々に毒を吸わせる人々に出会ったな

らば、すなわち、もし使徒が、福音の純潔とは全く相反する悪習慣を見たならば、彼は、果たしてそれを、「地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なもの」と非難しないであろうか。たばこの奴隷になっている人々は自分たちは、全き清めの祝福にあずかっていると主張して、天国への望みについて語るが、聖書は明白に「汚れた者……は、その中に決して入れない」と言明している（黙示録 21:27）。

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」（I コリント 6:19,20）。自分の体が聖霊の宮である者は、有害な習慣の奴隷とはならない。彼の能力はみな、血をもって彼を買い取られたキリストに属している。彼の所有物は主のもので

ある。この委託された資本を浪費するならば、どうして罪を免れることができるであろうか。キリストのしもべと自称する者が、毎年、莫大な額を無用で有害な道楽のために消費している一方で、多くの魂は、命の言葉に接することができずに滅びている。彼らは什一や諸献金において神のものを盗み、貧しい者の救援や福音の支持に与えるよりもっと多くのものを、自分自身を破滅に導く欲望の祭壇で焼き尽くしている。もしも、キリストの弟子であると公言する者がみな、真に清められるなら、その財産は、無用で有害なことのために浪費される代わりに、神の金庫に納められ、キリスト者は、節制と克己と自己犠牲の模範となり、こうして彼らは、世の光となり得るのである。

## キリスト者の特権

今や世界は、こぞって放縦に陥っている。「肉

の欲、目の欲、持ち物の誇」が大多数の人々を支配している。しかしキリストの弟子たちは、より神聖な召しを受けている。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。」この神の言葉に照らしてみても、世俗的満足や邪悪な習慣を全く放棄しない清めは真実のものではないという、我々の主張は正しい。

「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、……そして、汚れたものに触れてはならない」という条件に従う者に、神は、「わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」と約束なさるのである（Ⅱ コリント 6:17,18）。神の事柄において豊富な体験を持つことは、すべてのキリスト者の義務であり、また特権でもある。「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩

くことがなく、命の光をもつであろう」とイエスは言われた(ヨハネ 8:12)。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言 4:18)。信仰と服従は、一歩ごとにますますその魂を、「少しの暗いところもない」世の光なるキリストとの密接な関係に導くものである。義の太陽の輝きは、神のしもべたちの上に照り輝いているのであるから、彼らはその光を反射しなければならない。ちょうど天の星が、天には大いなる光があって、その栄光によって自分たちは輝いているのだということを、我々に告げている



ように、キリスト者は、大宇宙の王座に、讚美と誉れを受けるべき、ご品性の持ち主であられる神がおられるということを、表さなければならない。聖霊の恵み、神のご品性の純潔と神聖

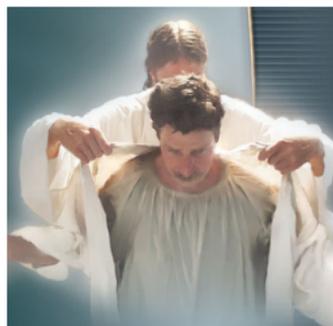
さが神の証人たちによってあらわされるのである。

パウロは、コロサイ人に送った手紙の中で、神が、その子供たちに対してどんなに豊かな祝福をお与えになるかについて、次のように述べている。わたしたちが「絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、主のみこころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。さらにまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍（ぶことである）」（コロサイ 1:9-11）。

また彼は、エペソの教会の兄弟たちに書き送って、彼らがキリスト者の特権の高さを理解するに至るよう望んだ。彼は、きわめて意味深い言葉をもって、至高者のむすこ、むすめとし

て彼らが持つことのできる驚くべき力と知識とを明らかにした。彼らは、「御霊により、力をもって……内なる人」が強くされ、「愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知」ることができる。しかし、使徒が、「神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」と祈るときに、この特権は最高潮に達するのである（エペソ 3:16-19）。

ここに、我々が神のご要求に応じるときに、我々の父なる神の約束を信じる信仰によって到達することのできる最高



点が示されている。我々は、キリストの功績によって、無限の力を持たれるお方のみ座に近づくことができる。「ご自身の御子をさえ惜しまない

で、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わないことがあるか」(ローマ 8:32)。父なる神は、そのみ子に惜しみなく聖霊をお与えになったが、我々もまた、聖霊に満たされることができるのである。イエスは言われた。「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあるか」(ルカ 11:13)。「何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。」「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」(ヨハネ 14:14;16:24)。

## キリストに頼る勝利の生活

キリスト者の生涯は、謙遜がその特質である

が、悲しみや自己を卑下する気持ちがあってはならない。神に受け入れられ祝福されるような生活することは、すべての者の特権である。我々が、罪の責め苦を感じ、いつも暗い顔をしていることは、天父のみ心ではない。その頭をたれ、自分のことばかり考えているのは、真の謙遜の証拠とはならない。我々は、イエスのもとに行って清められ、律法の前にはばかることなく立つことができるのである。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」(ローマ 8:1)。

イエスによって、墮落したアダムの子供たちは、「神の子」となる。「実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」(ヘブル 2:11)。ゆえにキリスト者の生涯は、神に対する信仰と、勝利と、神にある喜びの生活でなければならない。「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つか

らである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」(Iヨハネ 5:4)。神のしもべ、ネヘミヤが、「主を喜ぶことはあなたがたの力です」と言ったのは至言である(ネヘミヤ 8:10)。パウロも言っている。「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」(ピリピ 4:4、Iテサロニケ 5:16-18)。

これが、聖書に基づく悔い改めと清めの実である。しかし、神の律法に示された義の大原則が、キリスト教界において冷淡に扱われているために、こうした結果はなかなか見ることができない。これが、かつてのリバイバルに現れたような神の霊の深い永続的な働きが、ほとんど見られない理由である。

我々が変化するのは、ながめることによって

である。神が、律法を通してそのご品性の完全さと神聖さを人類に示しておられるにもかかわらず、人がこれをなおざりにし、人間の教えや理論に心をひかれるならば、その結果として、教会で生きた敬虔の念が失われ、衰えを生じるのは、何も不思議なことではない。主は言われる。彼らは、「生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った、それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ」(エレミヤ 2:13)。

「悪しき者のはかりごとによらず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしばまないように、そのなすところは皆栄える」(詩篇 1:1-3)。神の律法が、その正当な位置に回復されて初めて、神の民と称する人々の間に、初代教会の信仰と敬

虔のリバイバルが起こり得るのである。「主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ』」（エレミヤ6:16）。

もっと詳しく知りたい方のために、  
大争闘小冊子シリーズの完全版

## “キリストとサタンの大争闘”



E.G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

## 大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com